

第1篇 資本の諸変態とそれらの循環

第2章 生産資本の循環

第3節 貨幣蓄積

拡大再生産の場合、資本が生む剰余価値は単純再生産の場合のように全部消費されない。「現実には」一部分が所得として消費され、一部分は資本として蓄積される。

122 最小限の大きさを規定する 資本蓄積に向けられる剰余価値は、直ちに資本化されるわけではない。剰余価値が再投資されるためには、それに必要な最低の資本量に達している必要がある。

123 1 たとえば、…… 紡績業で例示。最低必要な資本量は事業の種類、資本の構成により異なる。この場合、「紡錘新調一個あたり1ポンド」

123 6 資本の循環が何回も繰返され、資本蓄積に向けられる剰余価値が、資本の必要最低限量に達していない場合には、資本の循環の繰返しにより蓄積されねばならない。
・剰余価値は貨幣形態で蓄積され、それが一定量に達してはじめて現実の追加的貨幣資本として機能する。

この貨幣は流通から引上げられたものであるから、退蔵貨幣の形態にある。しかし、商品生産に共通な貨幣退蔵がその自己目的ではない。それは資本の蓄積に一時的に随伴する準備過程である。従って、この退蔵貨幣は同時に潜在的貨幣資本の規定を受ける。

第4節 予備金

126 9 これに反して、

単純再生産で述べた「予備貨幣資本」は循環している資本価値の一部分である。これに対し、予備金は機能しつつある貨幣資本の一部分ではなく、未だに能動的な資本に転化されていない、剰余価値の一部分である。

貨幣蓄積基金は資本蓄積の条件としての潜在的貨幣資本であるが、再生産の規模の拡大とは関係なしに循環過程に入る。

すなわち生産手段の価格騰貴による循環の攪乱を調整する予備金として流用される。

この予備金としての蓄積基金は、流通過程の媒介の際、貨幣資本の諸部分が時期を異にして機能することから生じる予備貨幣資本とは違う。

それは機能しつつある貨幣資本の一構成部分ではなくて、追加的貨幣資本に転化されていない剰余価値が蓄積とは関係ない副次的目的にあてられたことを示す。

第3章 商品資本の循環

$G \rightarrow W \rightarrow G'$ の定式は資本の循環を抽象的に示している。この循環は3つの段階に分けられる。

第1章 貨幣資本の循環 $G \rightarrow W \cdots P \cdots W' \rightarrow G'$ (第1循環)

【簡単なおさらい】資本家は商品市場に買い手として出現。資本家は貨幣資本Gを商品Wへと転化する。貨幣は価値の自立的形態である。貨幣資本は資本の貨幣形態である。この購買行動が資本循環の一部分をなすのはこの行為が持つ関連による。つまり購買するのは、利潤をともなつて再び販売されるべき新しい商品を生産するためである。このことは購買する商品の特別な使用価値によって可能になる。資本家は生産手段Pmと労働力Aを購買するのであり、貨幣資本Gを生産資本Pへと転化するのである。

第2章 生産資本の循環 $P \cdots W' \rightarrow G' \rightarrow W \cdots P$ (第2循環)

【簡単なおさらい】流通過程は中断され、生産資本Pは生産過程で使用される。生産資本は生産手段と労働力からなっているが、生産手段と労働力が常にすでに生産資本であるということは意味しない。資本主義的生産過程の内部でのみ生産資本である。資本主義的生産過程の結果は、新たな商品群である。この商品群は価値増殖した資本の定在形態としての商品資本W'である。これは元々の商品群Wから質的に異なった消費ということだけでなく販売時にはWよりも高い価値を有している。

商品資本の循環(第3循環)は、資本家が商品資本に売り手として登場することで、流通過程は継続される。資本家は新しい商品群WをGとの交換で販売する。つまり資本家は商品資本を貨幣資本へと再転化するのだが、いまや価値増殖した、つまり剰余価値の分だけ大きくなった貨幣資本である。

- 128 1L 商品資本の循環の一般定式は、「 $W' \rightarrow G' \rightarrow W \cdots P \cdots W'$ 」
一資本にとって $G \rightarrow W$ であるものは他の資本にとっての $W' \rightarrow G'$ を含んでいる。
6L たとえば、石炭や機械などは、採炭業者や機械製造業者の商品資本である。
7L 第1循環 $G \cdots G'$ 貨幣資本の最初の反復に際し、既に貨幣資本のこの第2循環の完了以前に
 $P \cdots P$ なる循環のみでなく $W \cdots W$ 商品資本の循環もまた前提されている。
・貨幣資本の循環は資本の価値増殖を典型的に表現するもの。
・上記に対し生産資本の循環は個別資本の再生産の諸条件を示すもの。
・GもPも既に投下された資本価値を示している。Gは、生産資本の諸形態PmとAに転ずるという意味で再生産の可能性を含んでいる。また、Pは既に現実的な生産諸条件の形態をとっているという意味で再生産を表現している。
・貨幣資本の循環も生産資本の循環も、共に個別資本の循環をあらわすものであった。個別資本の循環を代表するのは、循環の出発点としてのGとPが共に再生産を開始する態勢を既に採っているからである。それぞれの資本の循環の内容と様式を規定するものは、出発点にある資本である。従って、貨幣資本の循環も生産資本の循環の場合も循環の外部における他の貨幣資本や商品資本を前提としているにも係わらず循環の出発点としてのGとPが共に再生産を開始する態勢にある。
- 129 後3L 商品資本の循環は…商品形態で増加された資本価値をもって開始されるのであり、…剰余価値の循環を含んでいる。
 W' 剰余価値を含むあらたな生産物、生産過程で生み出された商品資本により循環が開始され、 W' をもって終わる。
 W' は、その機能によって貨幣に、価値増殖された資本 G' に転化されねばならない。そのため再生産を含んでいる。
- 130 第3循環である商品資本の循環「 $W' \rightarrow G' \rightarrow W \cdots P \cdots W'$ 」を特徴づけるのは、増殖された資本価値が展開されるのではなく、むしろ増殖された資本価値が価値増殖の出発点として現れる点にある。
- 140 商品資本の循環ではWが生産されなければ循環が行われない。このWの大部分は W' として生産されたものである。然るに W' は運動の出発点であり通過点、終点として存在する。
・第1循環の貨幣資本の循環での終点、 G' は W' の転化された形態であり、生産資本の循環の終点PはGの転化された形態である。
これらの転化はいずれも流通過程における価値の形式的変態であるが、第3循環の終点 W' はPを先行の形態とし、この転化は使用価値と価値の現実的変態である。

それ故に第1循環では買い手の手中にある G' を、第2循環では売り手が持つ A 、 P_m が前提とされるが第3循環では循環外部の貨幣、商品は前提とならない。

141 W' は生産過程そのものの結果としてある。そのため第1循環では G が、第2循環では P が循環の発端、出発点において何物も前提とせず、「歴史的舞台に登場する最初の貨幣資本であり、最初の生産資本である」

143 ・第3循環では他人の諸商品たる W (A 、 P_m)を前提とせざるをえない。終点にある W' は前の G' 、 P とは異なつて流通の継続過程にあり、生産諸要素をなす諸商品に交換されなければならない。しかも外部の商品市場から $G-W$ によって W を受取る第2の極は循環の終点ではなく、生産の前提としての流通過程の終極である。

すなわち生産資本に転化され、その機能の結果として W' が再び、再度循環の終点を形成する。

言い換えれば終点の W' は直接に他人の貨幣、商品を前提とはしない。 W' は生産過程の直接の結果として、生産過程を再び準備し、商品を循環の再開始にあたつて前提とする。

144 このように第3循環は循環内部に W (A 、 P_m)の形態における他の産業資本を前提としている。だからこの循環は個別資本に共通の一般的運動形態を考察するだけでなく、個別資本の総括であり、社会的総資本を考察する基準を与えている。

146 第3循環は発端からして資本主義的生産の商品形態を示しており $W-G-W$ が目的として現れている。初めから社会的物質代謝を実現する生産的、個人的な消費が包括されている。

第3循環は個別資本の循環を超えて、それ以上の社会的総資本の運動を示す唯一の形態である。但し、これによって社会的総資本の運動そのものの考察が解決されるというものではない。ただその解決の基準が与えられるだけ。

147 第3循環では市場にある商品が生産および再生産過程の不断の前提をなしている。そのためこの形態を固定させると、生産過程のすべての要素を商品流通から生じて商品のみから成っている様に見なす一面的な把握に陥る。

148 商品資本の循環はケネーの経済表の基礎をなすものである。